

〔資 料〕

## エンデュランススポーツ実践者のスポーツ価値意識

中山 健  
(大阪体育大学)

### Sports value consciousness in endurance sports participants

Takeshi NAKAYAMA<sup>1)</sup>

#### 【Abstract】

The purpose of this study was to examine the distributions of sports value consciousness in comparison with the results of previous studies. The study explored the distributions of sports value consciousness, consisting of the 4 patterns of leisure, recreation, agôn and abstinence, among Japanese involved in physical activity and sports in community settings in previous studies conducted since the late 1980s. In this study, two surveys were conducted of participants in different endurance sports events using the same questionnaires as in previous studies. A set of cluster analyses using Ward's method was conducted for these two surveys. The results showed several different distributions between survey 1 and 2 in this study, and similarities between this and previous studies. Firstly, there were different percentages of distributions in the patterns of sports value consciousness between survey 1 and 2. One reason for this would seem to be that each event has unique criteria for participation. Secondly, there was a neutral pattern of sports value consciousness in both the current and previous studies. Consequently, in order to generalize for these research results, the need was indicated for a study based on random sampling to estimate the distributions of sports value consciousness in the endurance sports settings.

**Keyword** : Endurance sports, Sports value consciousness, Cluster analysis

**キーワード** : エンデュランススポーツ, スポーツ価値意識, クラスタ分析

---

1) *Osaka University of Health and Sport sciences*

## 1. はじめに

『スポーツライフデータ 2018』によると、日本における成人の週2回以上の運動・スポーツ実施者の割合は、1992年時点での16.1%から2018年時点で47.8%へと上昇している。運動・スポーツの実施内容においては、個人で実施可能な散歩、ウォーキング、体操、筋力トレーニングやジョギング、ランニングの実施率が活動種目の上位を占めた<sup>注)</sup>一方で、同期間において何らかのスポーツ組織に所属して運動・スポーツを実施した者は、20%前後で推移した。

こうした運動・スポーツ実施状況に対して、池田(2003)はスポーツ推進の考え方として、1970年代以降にヨーロッパから世界に広まっていった「Sports for All」という、全体を集散的に捉えてスポーツ実施者を増加させていく取り組み方ではなく、「Sports for Everyone」という、全体の中の各個体に主眼を置くスポーツ推進の必要性について指摘している。また、池田(2003)は、スポーツを、組織化された活動に限定せず、手軽にあるいはスポーツクラブに入らなくても、自分の能力あるいは自分の時間の都合でできる組織化されていない活動をもスポーツとして捉え、それが、実施者の、そして社会の便益としてどのような科学的根拠を有するのかを明らかにする必要性について言及している。

近年では、長時間の痛苦を伴うマラソン、トレイルランニングやトライアスロンなどのいわゆるエンデュランススポーツが、ジョギング・ランニング実践の延長上の実施種目として注目され、それらの大会はスポーツによる地域活性化やスポーツツーリズムの観点からも注目されている(笹川スポーツ財団, 2020)。組織化されたスポーツと比べて、個人での参加が比較的容易なエンデュランススポーツは、前述した個人に主眼を置くスポーツ推進の時代に適合しやすい活動であると言える。

こうしたエンデュランススポーツ実践について定性的および定量的な手法を用いた研究が報告されている。原田(1994)は、自らのマラソン体験を現象学的に記述し、現代社会におけるマラソンの社会的機能について報告した。また、浜田

(2009, 2013)は、個人競技としてのトライアスロン実践者が紡ぐ社会関係の有り様や、トライアスリートとしての実践が当該個人の生き方の中にどのように位置づけられるかなどについて、インタビューを中心とした定性的研究により明らかにした。一方、中山・瀧澤(2015)は、富士登山競走参加者に対するインタビュー調査において、健康志向で開始もしくは再開したウォーキング、ジョギングやランニングから競技会における自己記録追求へとランニング実践の目的が変容した回答者に接して、エンデュランススポーツ実践者のスポーツ価値意識について明らかにする必要性を記述した。

スポーツ価値意識に着目した研究として上杉(1986; 1990)の研究がある。上杉はスポーツ価値意識を捉える枠組みとして二つの水準を設定した。ひとつは、どのようにスポーツに取り組むのかという選択に関わるものである。この水準は、スポーツ行為者が、禁欲的な鍛錬をへたうえでスポーツ欲求を充足させようとする禁欲性志向と、即座にその場で気軽にスポーツ欲求を充足させようとする即時性志向とのどちらを選択するかというものである。もうひとつの水準は、どのようにスポーツを意義付けるかという選択に関わるものである。この水準は、スポーツ行為者が、スポーツをスポーツ以外の世俗的な何かのための手段として意義付けようとする手段性志向と、スポーツそれ自体を目的として意義付け、楽しさの追及を第一義的にとらえようとする自己目的性志向とのどちらを選択するかというものである。この二つの水準を交差させることで分類される4つの象限を、① 世俗内禁欲型(禁欲的鍛錬をへたスポーツ欲求の充足過程を通して何らかの外在的目的を達成しようとする)、② アゴン型(禁欲的鍛錬をへてスポーツ欲求そのものを充足しようとする)、③ レクリエーション型(即自的な欲求の充足過程を通して何らかの外在的目的を達成しようとする)、④ レジャー型(即時的にスポーツ欲求そのものを充足しようとする)というスポーツ価値意識で表している。そして36項目で構成される測定尺度を作成し大学生(上杉, 1986)、体育教師、一流競技者や地域スポーツ参与者・指導者(上杉,

1990)を対象に調査を実施した。統計解析において当該項目への反応傾向から機械的に4分類した初期の研究から、質的変数に関する多変量解析を用いた研究へと分析方法が高度化した。それに伴い4つのどの型にも属さず特定の型に移行中の中庸型に位置する分析対象者の存在が明らかとなったことも報告されている(上杉, 1986)。

中山・瀧澤(2015)は、参加資格制限を有するトレイルランニング大会参加者を対象に上杉(1986)の開発した測定尺度を簡略化して調査を行った。その結果は、上杉(1990)が1980年代後半に地域スポーツ参加者を対象にした研究と比較して、世俗内禁欲型の増加、レクリエーション型の減少、アゴン型の微増、そして同水準のレジャー型を示した。しかしながら、中山・瀧澤(2015)の研究は、参加資格制限を有する大会を調査対象としているため、調査対象の特性上、エンデュランススポーツ実践者全般を対象としたスポーツ価値意識の分布とは言えず、研究結果の一般化という観点から、さらなる調査の蓄積が必要である。

エンデュランススポーツ実践者に着目し、彼ら/彼女らのスポーツに対する意識のあり方、すなわち価値意識を捉えることは、見田(1966)が言及するような観点から重要であると考えられる。それは、「個々の行為の『動機』や『目的』に関する微視的なアプローチと、『文化のエトス』や『イデオロギー』に関する巨視的なアプローチとを統合」(見田, 1966, p.1)するという観点である。つまり、個人の行為を、微視的水準(ミクロレベル)と巨視的水準(マクロレベル)との双方から説明する枠組みとして価値意識を用いることで、個人の行為の意味を明らかにすることができるということである。

そこで本研究では、異なるエンデュランススポーツ大会参加者に対して先行研究と同様のスポーツ価値意識測定項目を適用し、先行研究の結果と比較することでエンデュランススポーツ実践者における近年のスポーツ価値意識の分布について検討することを目的とした。

## 2. 研究方法

### 2.1. 調査対象

調査対象となった大会はふたつであり、それらは大会参加資格制限を有するものと、そうではないものであった。それらの選択理由は、異なる調査対象からデータを得ることで、エンデュランススポーツ実践者のスポーツ価値意識に一定の傾向を確認することが可能となり、将来的な一般化可能性に資すると考えられたからであった。

### 2.2. スポーツ価値意識

見田(1966, pp.14-24)は価値を「主体の欲求をみたく、客体の性能」と定義した。ここでいう「主体」とは「個人または社会集団」、「欲求」とは「道徳的・芸術的・社会的欲求をふくむあらゆる分野において、『のぞましい』とする傾向のすべて」であり、「客体」とは「価値判断の対象となりうる一切のもの」と補足している(見田, 1966)。さらに、見田は「価値が客体の側にある」ことを明示し、客体に対する主体の明示的もしくは黙示的な価値判断の総体を「価値意識」と定義した。本研究では見田(1966)の価値意識の定義を参考に、スポーツ価値意識を、「個人がスポーツにいだく明示的または暗黙の価値判断の総体」と定義した。

本研究では、先行研究との比較が可能となるよう、上杉(1986)の測定項目のうち16項目を使用した。オリジナルの測定項目は36項目で構成されているが、当該項目に基づく分析対象の類型化に有意な関連を示した項目のみを、本研究では採用した。測定項目を簡略化した理由は、スタート前の限られた時間の中で調査を実施しなければいけないこと、および前述の2水準(禁欲性—即時性、手段性—自己目的性)を表す項目として16項目が類型化に関与したことによる。

### 2.3. 分析手順

全ての項目において回答結果を把握した後、スポーツ価値意識測定尺度の信頼性を確認するため、内的一貫性を評価する指標である $\alpha$ 係数を、禁欲性—即時性、手段性—自己目的性の各水準で算出した。その際、逆転項目の数値処理を行った。スポーツ価値意識測定項目のうち項目番号1から8は禁欲性—即時性を評価する項目であり、項目

番号9から16は手段性—自己目的性を評価する項目である。これらのうち、項目番号2・4・5・9・13・15は逆転項目となっている。「1. 全くそう思わない」、「2. そう思わない」、「3. どちらともいえない」、「4. そう思う」、「5. 強くそう思う」の5段階評定尺度で測定した（測定項目の番号は表1を参照）。

次に、Ward法による階層クラスター分析を行い、スポーツ価値意識による調査対象の類型化を行った。個体間の距離の測定方法には、ユークリッド平方距離を用いた。クラスター数の決定過程において、クラスター凝集経過工程の数値確認を行った。その後、確定したクラスター間でスポーツ価値意識項目の平均値を比較した。

最後に、クラスター間で個人的属性とのクロス集計、および運動・スポーツ実施状況に関連する変数を比較した。分析に使用した統計パッケージはIBM Statistics 24であった。

### 3. 調査1

場所・調査対象・調査方法：2015年9月25日から27日にかけて富士山周辺で開催されたウルトラトレイルマウントフジ2015のUTMFコース（約168.6キロ）参加者に対して、訓練を受けた調査員6名がスタート前に調査の趣旨を説明し、同意を得た者に所定の質問紙を配布・回収した。本調査では、事前に参加者名簿を入手できなかったため、母集団の人口統計学的傾向に基づいて調査対象を抽出できなかった。ウルトラトレイルマウントフジには、ふたつのコース（UTMFおよびSTY）設定があり、UTMFでは約169キロを46時間以内、STYでは約80キロを20時間以内の制限時間内に走りきることが求められる。また参加者は、参加条件として、大会実行委員会が定める他のトレイルランニング大会完走に関するポイントを獲得していることが求められている。質問紙の配布・回収数は225部、有効回収数は214部であった。UTMFコースへの出走者は1,363人（男性1,125人、女性238人）であり、完走率（46時間以内でゴール）は41.5%であった。

調査内容：スポーツ価値意識、個人的属性、トレイルランニング歴、トレイルランニングの月間

走行距離、運動・スポーツ実施、トレイルランニングシューズ購入時のシューズ選択基準優先度、1年間のトレイルランニングシューズ購入費用であった。

#### 3.1. 調査1の結果および考察

##### 3.1.1. 分析対象者の特性

分析対象者の性別は、男性165人（77.1%）、女性49人（22.9%）であった。年齢の範囲は、27歳から68歳、平均年齢は44歳（±8歳）であった。

運動・スポーツの実施頻度は、1ヶ月平均で10日（±7.7日）、1回の実施時間は、平均159分（±129.5分）、実施頻度の多い種目は順にジョギング・ランニング（45.5%）、トレイルランニング（33%）、マラソン（9%）であった。また、参加者のトレイルランニング歴は、平均9.8年（±7.9年）であった。

##### 3.1.2. スポーツ価値意識測定項目への反応傾向および尺度の信頼性

表1にスポーツ価値意識測定項目への反応傾向を示した。禁欲性—即時性を評価する項目において平均値で最も高い値を示したのは順に、項目番号1「スポーツで自己の限界に挑戦したい」（3.98）、項目番号6「競技会・大会を目指して頑張りたい」（3.91）、項目番号3「どこまでも技術の向上をめざしたい」（3.79）であった。項目番号2「厳しい練習をしてまでもスポーツをしたくない（逆転項目）」では、2.24と低い値を示した。これらの結果から、分析対象者は禁欲的に没入してスポーツに取り組む傾向がみられる。

一方、手段性—自己目的性を評価する項目間において平均値で高い値を示したものは順に、項目番号12「スポーツを通して人間形成をはかりたい」（3.93）、項目番号15「スポーツを生活の気晴らしのひとつとして行いたい（逆転項目）」（3.86）、項目番号14「スポーツを通して礼儀・作法を身につけたい」（3.79）、項目番号11「スポーツを通して社会生活に役立つものを得たい」（3.70）、項目番号9「遊びとしてのスポーツを行いたい（逆転項目）」（3.60）であった。これらの結果は、分析対象者が、スポーツをスポーツ以外の何かのための手段として意義付けようとする側面と、スポーツ自体を目的として意義付け、楽しさの追及

表 1 スポーツ価値意識測定項目への反応傾向 (UTMF)

項目	回答 n(%)					平均値	標準偏差
	全くそう思わない	そう思わない	どちらともいえない	そう思う	強くそう思う		
1. スポーツで自己の限界に挑戦したい	2(0.9)	11(5.1)	28(13.1)	122(57.0)	51(23.8)	3.98	.813
2. 厳しい練習をしてまでもスポーツをしたくない(R)	49(22.9)	99(46.3)	36(16.8)	26(12.1)	4(1.9)	2.24	1.000
3. どこまでも技術の向上をめざしたい	2(0.9)	12(5.6)	52(24.3)	112(52.3)	36(16.8)	3.79	.823
4. いつでもやめられる気楽さをもってスポーツをしたい(R)	7(3.3)	39(18.2)	66(30.8)	84(39.3)	18(8.4)	3.31	.974
5. 厳しい指導をうけてまでもスポーツをしたくない(R)	17(7.9)	69(32.2)	70(32.7)	50(23.4)	8(3.7)	2.83	.999
6. 競技会・大会を目指して頑張りたい	2(0.9)	16(7.5)	33(15.4)	111(51.9)	52(24.3)	3.91	.881
7. ひとつのスポーツに打ち込みたい	13(6.1)	63(29.4)	83(38.8)	43(20.1)	12(5.6)	2.90	.978
8. スポーツに自分のすべてを出し尽くしたい	7(3.3)	50(23.4)	69(32.2)	70(32.7)	18(8.4)	3.20	.997
9. 遊びとしてのスポーツをおこないたい(R)	4(1.9)	20(9.3)	56(26.2)	111(51.9)	23(10.7)	3.60	.870
10. 目的を持たずに面白さを味わうだけではスポーツをする意味がない	21(9.8)	74(34.6)	61(28.5)	44(20.6)	14(6.5)	2.79	1.081
11. スポーツを通して社会生活に役立つものを得たい	5(2.3)	12(5.6)	53(24.8)	116(54.2)	28(13.1)	3.70	.853
12. スポーツを通して人間形成をはかりたい	5(2.3)	11(5.1)	29(13.6)	117(54.7)	52(24.3)	3.93	.891
13. スポーツを通して人間形成ができたとしても、それは単なる結果にしかすぎない(R)	37(17.3)	88(41.1)	62(29.0)	21(9.8)	6(2.8)	2.40	.977
14. スポーツを通して礼儀・作法を身につけたい	5(2.3)	14(6.5)	41(19.2)	116(54.2)	38(17.8)	3.79	.894
15. スポーツを生活の気晴らしのひとつとして行いたい(R)	4(1.9)	9(4.2)	33(15.4)	134(62.6)	34(15.9)	3.86	.796
16. スポーツは何かを得るための手段である	4(1.9)	22(10.3)	65(30.4)	95(44.4)	28(13.1)	3.57	.911

を第一義的にとらえようとする側面のふたつの側面から捉えていることを表したものと考えられる。

α 係数は、16 項目全体で .702、禁欲性—即時性の 8 項目で .721、手段性—自己目的性の 8 項目で .430 であった。先行研究では、同係数は、禁欲性—即時性の 8 項目で .729、手段性—自己目的性の 8 項目で .651 (中山・瀧澤, 2015) であった。本調査では、手段性—自己目的性の水準で、基準の .700 を下回る値を示したが、16 項目全体での値を考慮し、以降の分析に進んだ。

### 3.1.3. スポーツ価値意識による分析対象者の類型化

スポーツ価値意識測定項目を用いて、分析対象者を Ward 法による階層クラスター分析により類型化した。上杉 (1986;1990) や中山・瀧澤 (2015) を参考にすれば、分析対象者は 4 つの解釈可能なクラスターに分類されると想定していたが、分析

の結果、分析対象者は 3 つの解釈可能なクラスターに分かれることが確認された。表 2 にクラスター分析によって類型化された 3 つのグループによるスポーツ価値意識測定項目の平均値の比較結果を示した。すべての項目においてクラスター間に有意差が認められた。その後、多重比較を行い、各クラスターの解釈を行った。

分析対象者の 36% を占めたクラスター 1 は、項目番号 4 「いつでもやめられる気楽さをもってスポーツをしたい (逆転項目)」(3.53) や、項目番号 2 「厳しい指導をうけてまでもスポーツはしたくない (逆転項目)」(3.17) で高い値を示した一方、項目番号 7 「ひとつのスポーツに打ち込みたい」(2.44) や、項目番号 8 「スポーツに自分のすべてを出し尽くしたい」(2.60) という項目で低い値、さらに項目番号 10 「目的を持たずに面白さを味わうだけではスポーツをする意味はない」(2.23) でも低い値を示した。この特徴から

表 2 3 クラスターにおけるスポーツ価値意識測定項目の平均値 (UTMF)

項目	Cluster 1	Cluster 2	Cluster 3	F値	事後比較 (p<.05)
	77人 (36.0%)	63人 (29.4%)	74人 (34.6%)		
1. スポーツで自己の限界に挑戦したい	3.56 (.966)	4.13 (.660)	4.28 (.537)	19.388***	C1<C2・C3
2. 厳しい練習をしてまでもスポーツをしたくない(R)	2.61 (1.114)	2.24 (.946)	1.85 (.753)	12.002***	C1>C2>C3
3. どこまでも技術の向上をめざしたい	3.32 (.818)	4.00 (.672)	4.08 (.736)	22.914***	C1<C2・C3
4. いつでもやめられる気楽さをもってスポーツをしたい(R)	3.53 (.804)	3.29(1.054)	3.11(1.028)	3.710***	C1>C3
5. 厳しい指導をうけてまでもスポーツをしたくない(R)	3.17(1.031)	3.03(.915)	2.30(.806)	18.970***	C1・C2>C3
6. 競技会・大会を目指して頑張りたい	3.51 (.898)	4.13 (.729)	4.15 (.839)	14.287***	C1<C2・C3
7. ひとつのスポーツに打ち込みたい	2.44 (.851)	3.24(.979)	3.08 (.933)	15.303***	C1<C2・C3
8. スポーツに自分のすべてを出し尽くしたい	2.60 (.877)	3.35(.986)	3.69(.793)	30.152***	C1<C2<C3
9. 遊びとしてのスポーツをおこないたい(R)	3.69(.799)	3.19(.948)	3.86(.746)	11.910***	C2<C1・C3
10. 目的を持たずに面白さを味わうだけではスポーツをする意味がない	2.23(.759)	3.92(.789)	2.42(.844)	89.908***	C1・C3<C2
11. スポーツを通して社会生活に役立つものを得たい	3.26(.951)	3.79(.806)	4.08(.517)	21.507***	C1<C2<C3
12. スポーツを通して人間形成をはかりたい	3.47(.995)	3.98(.793)	4.38(.566)	24.179***	C1<C2<C3
13. スポーツを通して人間形成ができたとしても、それは単なる結果にしかすぎない(R)	2.71(.944)	2.70(1.010)	1.81(.676)	24.975***	C1・C2>C3
14. スポーツを通して礼儀・作法を身につけたい	3.45(.804)	3.67(1.078)	4.23(.586)	17.268***	C1・C2<C3
15. スポーツを生活の気晴らしのひとつとして行いたい(R)	3.83(.715)	3.57(.979)	4.15(.589)	9.792***	C2<C1<C3
16. スポーツは何かを得るための手段である	3.25(.962)	3.62(.728)	3.85(.902)	9.120***	C1<C2・C3

\*\*\*p&lt;.001

クラスター1は、即時的にスポーツ欲求そのものを充足しようとするレジャー型と捉えることができる。

クラスター2は、項目番号7「ひとつのスポーツに打ち込みたい」(3.24)、項目番号10「目的を持たずに面白さを味わうだけではスポーツをする意味がない」(3.92)で高い値を示した一方、項目番号9「遊びとしてのスポーツをおこないたい」(3.19)では他のふたつのクラスターとは有意に低い値を示した。このような特徴からクラスター2は、禁欲的鍛錬をへてスポーツ欲求そのものを充足しようとするアゴン型と捉えることができ、分析対象の29.4%を占めた。

クラスター3は、項目番号12「スポーツを通して人間形成をはかりたい」(4.38)、項目番号1「スポーツで自己の限界に挑戦したい」(4.28)、項目番号14「スポーツを通して礼儀・作法を身につ

けたい」(4.23)、項目番号3「どこまでも技術の向上をめざしたい」(4.08)、項目番号6「競技会・大会を目指して頑張りたい」(4.15)で高い値を示した一方、項目番号13「スポーツを通して人間形成ができたとしても、それは単なる結果にしか過ぎない」(1.81)で低い値を示した。このような特徴からクラスター3は、禁欲的鍛錬をへたスポーツ欲求の充足過程を通して何らかの外在的目的を達成しようとする世俗内禁欲型と捉えることができ、分析対象の34.6%を占めた。

### 3.1.4. クラスター間における属性およびスポーツ実施関連変数の比較

表3に、3つのクラスターで性別、年代の分布およびトレイルランニングシューズ購入時の選択基準優先度に関するクロス集計、さらにトレイルランニング歴、トレイルランニングの月間走行距離、スポーツ実施の月頻度と1回実施時間および

表 3 3 クラスターにおける属性、トレイルランニング歴およびスポーツの実施頻度・時間 (UTMF)

項目		Cluster 1	Cluster 2	Cluster 3	F値 / $\chi^2$ 値
		77人(36.0%)	63人(29.4%)	74人(34.6%)	
性別	男性	61(79.2%)	53(84.1%)	51(68.9%)	$\chi^2=4.764^{\dagger}$ d.f.= 2
	女性	16(20.8%)	10(15.9%)	23(31.1%)	
年代	30歳台以下	18(24.3%)	14(22.6%)	19(25.7%)	$\chi^2=1.000$ d.f.= 4
	40歳台	33(44.6%)	30(48.4%)	37(50.0%)	
	50歳台以上	23(31.1%)	18(29.0%)	18(24.3%)	
トレイルランニング歴(単位,年)		9.87(±7.15)	9.54(±6.52)	9.90(±9.57)	F=.042
トレイルランニング月間走行距離(単位,キロ)		155.7(±86.14)	196.6(±96.24)	191.8(±97.88)	F=4.054*
1年間でのトレイルランニングシューズ購入費用(単位,円)		28,671(±21,014)	36,049(±32,096)	36,090(±28,399)	F=1.793
トレイルランニングシューズ購入時の優先順位	価格	15(21.4%)	8(13.8%)	5(7.7%)	$\chi^2=8.448$ d.f.= 6
	デザイン	13(18.6%)	8(13.8%)	14(21.5%)	
	機能	37(52.9%)	33(56.9%)	35(53.8%)	
	メーカー	5(7.1%)	9(15.5%)	11(16.9%)	
スポーツ実施頻度(月頻度)		9.39(±6.98)	9.86(±8.18)	12.03(±7.92)	F=2.337 <sup>†</sup>
スポーツ実施時間(1回あたり,単位分)		158(±137)	187(±147)	138(±99)	F=2.292

<sup>†</sup> p<.10 \*p<.05

トレイルランニングシューズの購入費用について平均値の比較結果を示した。有意差の認められた項目は、トレイルランニング月間走行距離であった。アゴン型と解釈されたクラスター2が他のクラスターと比較して有意に長い月間走行距離を示した。これら有意差のあった項目のすべてにおいてレジャー型と解釈されたクラスター1は低い値を示した。

#### 4. 調査2

場所・調査対象・調査方法：2015年12月6日に沖縄県那覇市で開催された第31回NAHAマラソンの参加者に対して、スタート前日の走者へのナンバーカード引き渡し会場出口において、訓練を受けた調査員6名が調査の趣旨を説明し、同意した者に所定の質問紙を配布・回収した。本調査においても、事前に参加者名簿を入手できなかったため、母集団の人口統計学的傾向に基づいて調査対象を抽出できなかった。また、同大会には調査1のような参加資格条件は設定されていなかった。質問紙の配布・回収数は442部、有効回

収数は426部であった。出走者は26,679人(男性19,706人、女性6,973人)、完走率は68.69%であった。そのうち県内在住者は15,778人(男性11,820人、女性3,958人)、県外在住者は10,063人(男性7,307人、女性2,756人)、海外在住者は838人(男性579人、女性259人)であった。

調査内容：スポーツ価値意識、個人的属性、ランニング歴、ランニングの月間走行距離、運動・スポーツ実施、ランニングシューズ購入時のシューズ選択基準優先度、1年間のランニングシューズ購入費用であった。

#### 4.1. 調査2の結果および考察

##### 4.1.1. 分析対象者の特性

分析対象者の性別は、男性296人(69.5%)、女性130人(30.5%)であった。年齢の範囲は、16歳から74歳、平均年齢は39歳(±12歳)であった。

運動・スポーツの実施頻度は、1ヶ月平均で10日(±7日)、1回の実施時間は、平均102分(±75分)、実施頻度の多い種目は順にジョギング・ランニング(69.5%)、サッカー・フットサル

(6.6%), 水泳 (3.4%), テニス (3.4%) であった。

#### 4. 1. 2. スポーツ価値意識測定項目への反応傾向および尺度の信頼性

表4にスポーツ価値意識測定項目への反応傾向を示した。禁欲性—即時性を評価する項目間において平均値で最も高い値を示したのは順に、項目番号6「競技会・大会を目指して頑張りたい」(3.80)、項目番号3「どこまでも技術の向上をめざしたい」(3.57)であった。項目番号2「厳しい練習をしてまでもスポーツをしたくない(逆転項目)」では、2.52と低い値を示した。これらの結果から、分析対象者は禁欲的に没入してスポーツに取り組む傾向がみられる。また、手段性—自己目的性を評価する項目間において平均値で高い値を示したものは順に、項目番号15「スポーツを生活の気晴らしのひとつとして行いたい(逆転項目)」(3.98)、項目番号12「スポーツを通して人

間形成をはかりたい」(3.84)、項目番号14「スポーツを通して礼儀・作法を身につけたい」(3.77)、項目番号16「スポーツは何かを得るための手段である」(3.74)であった。項目番号13「スポーツを通して人間形成ができたとしても、それは単なる結果にしか過ぎない(逆転項目)」では2.52と低い値を示した。これらの結果は、分析対象者が、スポーツをスポーツ以外の何かのための手段として意義付けようとする側面と楽しさの追及を第一義的にとらえようとする側面のふたつの側面から捉えていることを表しているものと考えられる。スポーツ価値意識測定項目への反応は本研究調査1と類似した傾向を示した。

測定尺度の信頼性を確認するため、調査1と同様に $\alpha$ 係数を算出した。16項目全体で.767、禁欲性—即時性の8項目で.735、手段性—自己目的性の8項目で.499であった。調査1と同様に、

表4 スポーツ価値意識測定項目への反応傾向 (NAHA マラソン)

項目	回答 n(%)					平均値	標準偏差
	全くそう思わない	そう思わない	どちらともいえない	そう思う	強くそう思う		
1. スポーツで自己の限界に挑戦したい	16( 3.8)	58(13.6)	96(22.5)	195(45.8)	61(14.3)	3.53	1.018
2. 厳しい練習をしてまでもスポーツをしたくない(R)	65(15.3)	170(39.9)	105(24.6)	76(17.8)	10( 2.3)	2.52	1.027
3. どこまでも技術の向上をめざしたい	5( 1.2)	57(13.4)	109(25.6)	202(47.4)	53(12.4)	3.57	.914
4. いつでもやめられる気楽さをもってスポーツをしたい(R)	21( 4.9)	57(13.4)	111(26.1)	170(39.9)	67(15.7)	3.48	1.063
5. 厳しい指導をうけてまでもスポーツをしたくない(R)	32( 7.5)	121(28.4)	141(33.1)	97(22.8)	35( 8.2)	2.96	1.069
6. 競技会・大会を目指して頑張りたい	10( 2.3)	33( 7.7)	93(21.8)	185(43.4)	105(24.6)	3.80	.974
7. ひとつのスポーツに打ち込みたい	30( 7.0)	141(33.1)	124(29.1)	94(22.1)	37( 8.7)	2.92	1.085
8. スポーツに自分のすべてを出し尽くしたい	32( 7.5)	116(27.2)	136(31.9)	82(19.2)	60(14.1)	3.05	1.153
9. 遊びとしてのスポーツをおこないたい(R)	8( 1.9)	31( 7.3)	118(27.7)	197(46.2)	72(16.9)	3.69	.901
10. 目的を持たずに面白さを味わうだけではスポーツをする意味がない	53(12.4)	121(28.4)	131(30.8)	94(22.1)	27( 6.3)	2.81	1.107
11. スポーツを通して社会生活に役立つものを得たい	8( 1.9)	40( 9.4)	111(26.4)	205(48.1)	62(14.6)	3.64	.908
12. スポーツを通して人間形成をはかりたい	5( 1.2)	27( 6.3)	95(22.3)	203(47.7)	96(22.5)	3.84	.885
13. スポーツを通して人間形成ができたとしても、それは単なる結果にしかすぎない(R)	58(13.6)	180(42.3)	112(26.3)	61(14.3)	15( 3.5)	2.52	1.011
14. スポーツを通して礼儀・作法を身につけたい	7( 1.6)	36( 8.5)	88(20.7)	221(49.5)	84(19.7)	3.77	.916
15. スポーツを生活の気晴らしのひとつとして行いたい(R)	7( 1.6)	12( 2.8)	64(15.0)	243(57.0)	100(23.5)	3.98	.804
16. スポーツは何かを得るための手段である	4( .9)	39( 9.2)	102(23.9)	201(47.2)	80(18.8)	3.74	.900

手段性—自己目的性の水準で、基準の .700 を下回る値を示したが、16 項目全体での値を考慮し、以降の分析に進んだ。

#### 4.1.3. スポーツ価値意識による類型化

調査1と同様の手続きでクラスター分析を行った。分析の結果、分析対象者は3つの解釈可能なクラスターに分かれることが確認された。表5に、クラスター分析によって類型化された、3つのグループによるスポーツ価値意識測定項目の平均値の比較結果を示した。項目番号15を除いたすべての項目においてクラスター間に有意差が認められた。その後、多重比較を行い、各クラスターの解釈を行った。

分析対象の43.2%を占めるクラスター1は、項目番号9「遊びとしてのスポーツを行いたい」(3.84)、項目番号4「いつでもやめられる気楽さ

をもってスポーツをしたい」(3.74) や項目番号5「厳しい指導をうけてまでもスポーツはしたくない」(3.51) で高い値を示した一方、項目番号8「スポーツに自分のすべてを出し尽くしたい」(2.46) や項目番号7「ひとつのスポーツに打ち込みたい」(2.57) で低い値を示した。この特徴からクラスター1は、即時的にスポーツ欲求そのものを充足しようとするレジャー型と捉えることができる。

クラスター2は他のふたつのクラスターと比較して、項目番号4「いつでもやめられる気楽さをもってスポーツをしたい(逆転項目)」(3.23) で低い値を示した一方で、項目番号10「目的を持たずに面白さを味わうだけではスポーツをする意味がない」(3.09) で高い値を示した。このクラスターは調査1の結果のように、上杉(1986)の

表 5 3 クラスターにおけるスポーツ価値意識測定項目の平均値 (NAHA マラソン)

項目	Cluster 1	Cluster 2	Cluster 3	F値	事後比較(p<.05)
	184人(43.2%)	188人(44.1%)	54人(12.7%)		
1. スポーツで自己の限界に挑戦したい	2.95(.1023)	3.90(.682)	4.26(.915)	76.721***	C1<C2<C3
2. 厳しい練習をしてまでもスポーツをしたくない(R)	3.03(.986)	2.28(.845)	1.63(.808)	62.528***	C1>C2>C3
3. どこまでも技術の向上をめざしたい	2.94(.824)	3.91(.615)	4.48(.606)	138.261***	C1<C2<C3
4. いつでもやめられる気楽さをもってスポーツをしたい(R)	3.74(.926)	3.23(.975)	3.44(1.513)	11.279***	C1>C2
5. 厳しい指導をうけてまでもスポーツをしたくない(R)	3.51(.905)	2.71(.910)	1.94(1.036)	72.222***	C1>C2>C3
6. 競技会・大会を目指して頑張りたい	3.39(1.029)	3.94(.775)	4.74(.521)	54.872***	C1<C2<C3
7. ひとつのスポーツに打ち込みたい	2.57(.903)	2.92(.997)	4.15(1.071)	55.894***	C1<C2<C3
8. スポーツに自分のすべてを出し尽くしたい	2.46(.946)	3.19(.971)	4.59(.740)	112.040***	C1<C2<C3
9. 遊びとしてのスポーツをおこないたい(R)	3.84(.818)	3.59(.806)	3.52(1.328)	4.843**	C1>C2・C3
10. 目的を持たずに面白さを味わうだけではスポーツをする意味がない	2.68(1.050)	3.09(1.083)	2.30(1.127)	13.818***	C2>C1>C3
11. スポーツを通して社会生活に役立つものを得たい	3.11(.858)	3.99(.603)	4.22(1.022)	75.553***	C1<C2・C3
12. スポーツを通して人間形成をはかりたい	3.31(.854)	4.12(.613)	4.67(.840)	95.478***	C1<C2<C3
13. スポーツを通して人間形成ができたとしても、それは単なる結果にしかすぎない(R)	2.67(.896)	2.45(.949)	2.24(1.440)	4.543*	C1>C2・C3
14. スポーツを通して礼儀・作法を身につけたい	3.35(.970)	3.98(.658)	4.46(.840)	48.428***	C1<C2<C3
15. スポーツを生活の気晴らしのひとつとして行いたい(R)	3.93(.783)	3.97(.682)	4.17(1.178)	1.833	n.s.
16. スポーツは何かを得るための手段である	3.45(.879)	3.85(.783)	4.35(.974)	26.416***	C1<C2<C3

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

表6 3クラスターにおける属性, トレイルランニング歴およびスポーツの実施頻度・時間 (NAHA マラソン)

項目		Cluster 1 184人(43.2%)	Cluster 2 188人(44.1%)	Cluster 3 54人(12.7%)	F値/χ <sup>2</sup> 値
性別	男性	123(67.2%)	133(71.5%)	40(75.5%)	χ <sup>2</sup> =1.634 d.f.=2
	女性	60(32.8%)	53(28.5%)	13(24.5%)	
年代	20歳台以下	34(20.2%)	46(26.9%)	23(45.1%)	χ <sup>2</sup> =19.704** d.f.=6
	30歳台	55(32.7%)	44(25.7%)	17(33.3%)	
	40歳台	47(28.0%)	50(29.2%)	10(19.6%)	
	50歳台以上	32(19.0%)	31(18.1%)	1(2.0%)	
居住地	沖縄県内	66(36.3%)	78(43.6%)	30(58.8%)	χ <sup>2</sup> =8.544* d.f.=2
	沖縄県外	116(63.7%)	101(56.4%)	21(41.2%)	
ランニング歴(単位,年)		7.0(±7.1)	8.2(±8.2)	7.8(±8.2)	F=1.046
ランニング月間走行距離(単位,キロ)		70.5(±63.2)	88.8(±78.4)	93.0(±74.9)	F=3.316*
1年間でのランニングシューズ購入費用(単位,円)		15,073(±17,578)	16,226(±12,632)	15,814(±10,549)	F=.276
トレイルランニングシューズ 購入時の優先順位	価格	27(17.3%)	19(11.8%)	4(8.7%)	χ <sup>2</sup> =3.398 d.f.=6
	デザイン	17(10.9%)	16(9.9%)	5(10.9%)	
	機能	97(62.2%)	109(67.7%)	32(69.6%)	
	メーカー	15(9.6%)	17(10.6%)	5(10.9%)	
スポーツ実施頻度(月頻度)		8.1(±6.2)	9.8(±6.9)	13.2(±8.4)	F=11.703***
スポーツ実施時間(1回あたり,単位分)		95.5(±72.0)	99.7(±74.5)	131.0(±79.9)	F=4.470*

\*p&lt;.05 \*\*p&lt;.01 \*\*\*p&lt;.001

提示した4つのカテゴリー(世俗内禁欲型, アゴン型, レクリエーション型, レジャー型)に明確に当てはまるというよりも, 世俗内禁欲型とレジャー型の中間に位置するような項目への反応傾向を示した。これに類似したクラスターは, 上杉(1986)が, 1980年代中頃に大学生を対象に実施した調査においても報告されており, 中庸型と解釈した。クラスター2は, 分析対象の44.1%を占めた。

クラスター3は, 項目番号6「競技会・大会を目指して頑張りたい」(4.74), 項目番号12「スポーツを通して人間形成をはかりたい」(4.67)など他のクラスターと比較して, 多くの項目で高いまたは低い値を示した。このような特徴から, クラスター3は, 禁欲的鍛錬をへたスポーツ欲求の充足過程を通して何らかの外在的目的を達成しようとする世俗内禁欲型と捉えることができる。クラスター3は分析対象の12.7%を占めた。

#### 4.1.4. クラスター間における属性およびスポーツ実施関連変数の比較

表6に, 3つのクラスター間での性別, 年代の分布およびトレイルランニングシューズ購入時の選択基準優先度に関するクロス集計, さらにトレイルランニング歴, トレイルランニングの月間走行距離, スポーツ実施の月頻度と1回実施時間およびトレイルランニングシューズの購入費用について平均値の比較結果を示した。有意差の認められた項目は, 年代, 居住地, ランニング月間走行距離, スポーツ実施頻度および1回あたりのスポーツ実施時間であった。世俗内禁欲型と解釈されたクラスター3では, 20歳台および30歳台の県内からの参加者が多く, スポーツ実施頻度(月頻度)や1回あたりのスポーツ実施時間が他のクラスターに比べ有意に高かった。中庸型と解釈されたクラスター2においては, 40歳台以上の, そして県外からの参加者の占める割合がクラスター1と類似していたが, ランニングの月間走行

距離はクラスター1より有意に長く、またクラスター3より有意に短かった。また、スポーツ実施月頻度や1回あたりスポーツ実施時間においてもクラスター1より有意に高く、クラスター3より有意に低い値を示した。

## 5. 総合論議

本研究では、近年参加人口が増加しているエンデュランススポーツに着目し、ふたつの大会の参加者をスポーツ価値意識の側面から分類し先行研究との比較検討を試みた。世俗内禁欲型に該当した分析対象者は、中山・瀧澤(2015)で34%、本研究調査1で34.6%、調査2では12.7%であった。レジャー型に該当した分析対象者は、中山・瀧澤(2015)で25.5%、本研究調査1で36%、調査2では43.2%であった。本研究調査1において、分析対象者は、上杉(1986)の設定した枠組みで解釈可能な3つの型(世俗内禁欲型、レジャー型、アゴン型)に分類されたが、本研究調査2では、分析対象者は、世俗内禁欲型とレジャー型との既存枠組みで解釈可能なふたつのカテゴリーのほかに、中庸型とされる類型に該当した。

本研究調査1の分析対象者は、その大会に参加するために一定のトレイルランニング経験を有していなければならず、既に何らかの定まったスポーツ価値を内面化していた可能性が高い。それ故に、上杉(1986;1990)が設定した、既存のスポーツ価値意識の枠組みで明確に解釈が可能であったと推察できる。

しかしながら、本研究調査2では、上杉(1986)の報告した中庸型に位置するスポーツ価値意識を有する人々が多く存在した。その理由のひとつとして、参加資格条件のない大会を調査対象としたことがあげられる。本研究調査2において、中庸型と解釈されたクラスター2に40歳台以上の参加者の割合が多かったことは、青年時代の運動経験に関わらずジョギングやランニングが取り組みの容易な活動となっていることを例示していると考えられる。上杉(1986)が研究対象とした大学生のうち、過去に運動部所属経験を有した者は、中庸型から世俗内禁欲型へ移行し、一方、運動部所属経験を有しなかった者は、中庸型からレ

ジャー型へ移行していく傾向のあったことを数量化Ⅲ類の分析結果として報告している。このことから本研究調査2において中庸型(44.1%)に分類された分析対象は、今後、レジャー型もしくは世俗内禁欲型のスポーツ価値意識に移行する可能性がある。

ところで近年、中高齢者の運動・スポーツ実践を加齢発達学の観点から捉える動向がある(長ヶ原, 2007)。加齢発達学は、これまでの中年期から高齢期に至る期間を衰退の過程として捉えるのではなく、加齢による発達から成熟の過程として捉える観点を提供する。この観点を中高齢者の運動・スポーツ場面に当てはめると、ヘルススポーツ、レジャースポーツ、マスターズスポーツという3つのカテゴリーから中高齢者のスポーツ実践を把握することが可能となる。この観点を援用すれば、本研究調査2において中庸型に分類された対象は、スポーツ価値意識の新たな位相へ位置づけることができるかもしれない。その理由として、原田(1994)や浜田(2009;2013)は、個人種目としてのマラソンやトライアスロンの実践者間に、練習やレースの場面で自然発生的な連帯の生じることについて記述している。エンデュランススポーツ実践者間において、一時的に自然発生的なスポーツ集団が生まれるという現象は、新たな社会関係を構築する可能性を有していると同時に、上杉(1986)の提示したスポーツ価値意識に新たなカテゴリーを加えることにもつながると考えられるからである。その理由として、近年、注目を集めているマスターズスポーツへの参加者の増加傾向がある。Hikoji et al.(2012)は、マスターズ甲子園大会参加者に対するインタビュー調査の結果から、マスターズスポーツの多層のおよび多面的な便益として、例えば、個人レベルにおける競技や楽しみという側面のみならず、地域レベルにおける支援や交流、社会レベルにおける中高齢者の役割モデルの変容などを報告している。種目は異なるが、本研究調査2で中庸型に分類された人々は、原田(1994)、浜田(2009;2013)やHikoji et al.(2012)の報告するような便益を得て、上杉(1986;1990)の4分類とは異なるマスターズスポーツの価値観を内面化する可能性が考えら

れる。

また、本研究調査2においてレジャー型と中庸型に沖縄県外参加者の割合が多かったことは、近年注目を集めるスポーツツーリズムにおいて、どのような参加者をターゲットとするのかを考える上で有益な情報を有しているかもしれない。全体の中の各個体に主眼を置くスポーツ推進の時代におけるスポーツ実践の受け皿として、ジョギングやランニングなどのエンデュランス種目は今後も実施人口の増加が見込まれる。どのような属性を持つ人々をターゲットにするのかを考える際には、イベント参加者の満足度を高める上で重要な要因になるものと思われる。

最後に、本研究では、調査対象者の過去のスポーツ経験や現在のスポーツ組織所属状況などについては、調査用紙の紙幅の限界で確認することができなかった。また、調査結果の一般化のためには、母集団を代表するようなサンプルの抽出の必要性も含めて、さらに多くのエンデュランススポーツ実践者を対象とした調査が必要である。今後の課題としたい。

## 注

スポーツ基本法において、スポーツは「心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進、精神的な充足感の獲得、自律心その他の精神の涵（かん）養等のために個人又は集団で行われる運動競技その他の身体活動」と定義されている。本研究で用いる「運動・スポーツ」という用語は、スポーツ基本法で定義されているスポーツと同様である。

## 文献

- 長ヶ原誠 (2007) ジェロントロジースポーツ総論。長ヶ原誠ほか著、ジェロントロジースポーツ—成熟社会を“好く”生きる人のためのスポーツライフ—。日本工業新聞社<フジサンケイビジネスアイ>。pp.12-49。
- Hikoji, K., Chogahara, M., Tani, M., Sonoda, D., Matsumura, Y., Okada, A., Takada, Y., Ishizawa, N. (2012) The Multidimensional

Benefits of Participation in Masters Sports: A Case Study of the “Masters Koshien”. *International Journal of Sport and Health Science*, 10:90-101.

- 浜田雄介 (2009) エンデュランススポーツの実践を支え合う「仲間」—トライアスリートの互酬的实践の記述分析から—。スポーツ社会学研究, 17 (1) : 73-84.
- 浜田雄介 (2013) エンデュランススポーツの体験に関する一考察—広島県西部のトライアスリートの事例から—。スポーツ社会学研究, 21 (1) : 111-119.
- 原田達 (1994) マラソンの現象学—ある心情の編成—。追手門学院大学文学部紀要, 29 : 57-74.
- 池田勝 (2003) 生涯スポーツの現在・未来—〈みんなのスポーツ〉から〈個のスポーツ〉の時代への変化—。生涯スポーツ学研究, 1 (1) : 11-19.
- 見田宗介 (1966) 価値意識の理論。弘文堂, p.1, pp.14-24.
- 文部科学省 (online) (2011) スポーツ基本法。 [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm), (参照日 2020年12月17日)
- 中山健・瀧澤弘光 (2015) 中高齢者のスポーツ価値意識—エンデュランススポーツ実践者の事例研究—。大阪体育大学紀要, 46 : 51-62.
- 笹川スポーツ財団 (2018) スポーツライフデータ2018—スポーツライフに関する調査報告書—。笹川スポーツ財団, pp.82-97, 102-107.
- 笹川スポーツ財団 (2020) スポーツ白書—2030年のスポーツのすがた—。笹川スポーツ財団, pp.175-177.
- 上杉正幸 (1986) 大学生のスポーツ価値意識について (5) —数量化によるパターン分類。香川大学教育学部研究報告 I -67 : 21-35.
- 上杉正幸 (1990) スポーツ価値意識のパターンとその関連要因の分析—一流競技参加者と地域スポーツ参加者の比較—。体育・スポーツ社会学研究会編, 体育・スポーツ社会学研究 9 スポーツの多様性をさぐる。道徳書院, pp.1-21.